

令和2年度 環境測定分析統一精度管理調査 関東甲信静ブロック会議 議事録

日時：令和2年12月23日（水）

13時30分から15時30分まで

場所：web 会議室

1 開会

2 挨拶

神奈川県環境科学センター

環境省水・大気環境局総務課環境管理技術室

所長 加藤 洋 氏

室長 平澤 崇裕 氏

3 議事

- (1) 令和元年度環境測定分析統一精度管理調査結果について
一般財団法人 日本環境衛生センター 環境事業第二部

係長 梶 史生 氏

- (2) 環境測定分析における留意点及び精度管理について

・国立研究開発法人国立環境研究所 地域環境研究センター

主任研究員 越川 昌美 氏

・環境省環境調査研修所

主任教官 藤森 英治 氏

・国立研究開発法人産業技術総合研究所 計量標準総合センター

物質計測標準研究部門有機組成標準研究グループ

主任研究員 大竹 貴光 氏

・（元）環境省環境調査研修所

主任教官 渡辺 靖二 氏

4 質疑応答

- (1) 土壌試料について

Q 土壌分析に関する精度管理はいつも含有量試験を対象にしています。今後、溶出量試験を対象にする予定はあるのでしょうか？溶出量試験は、分析結果がばらつきやすいという特徴を有しています（微細な土壌コロイドが生成しやすい土壌試料では特に大きくばらつく）。測定方法の問題点を抽出して分析方法の改善を図ることが統一精度管理事業の目的であることから、ばらつく原因を明確にすることも重要であると思います。

A1 土壌溶出試験は計画しておりますが、試験に耐えうる濃度の試料が入手できなければ変更の可能性がございます。

A2 均質で、かつ有害金属の溶出が一定レベルで見込める試料が利用できれば溶出試験の実施が可能です。現状では適切な試料の入手が困難です。

溶出試験のばらつきが大きくなるのは、本質的に不可避だと思われるため、ばらつかない試料や元素を選択するのはあまり意味がないと思います。

ICP-AES や原子吸光で測定できるレベルの試料が望ましいですが、現実的には六価クロムやホウ素が対象となるのでしょうか。必要な試料量も格段に増え、現実的にはかなり困難だと思います。

実際に、この土壌の溶出に関しては、溶出法の検討もされているようであり、例えば、遠心分離の条件をもう少し厳しくするとか、ろ紙の孔径を小さくすると

か、そういった検討もなされているようで、そのあたりの進捗にもよるものと考えられます。

なかなか、いろいろ考えていくと、溶出試験というのは今すぐできますとは言えないですが、需要があることは把握していますので、時期をみていいサンプルが入れば取り上げていきたいと考えております。

5 次期開催機関挨拶

横浜市環境科学研究所

所長 百瀬 英雄 氏

6 閉会